

やけど(熱傷)に対する応急手当



～やけどとは～

やけど(熱傷)は、熱いお湯や油が体にかかったり、炎や鍋などの熱いものに触れたりすると生じます。あまり熱くない湯たんぽやこたつの熱などが、体の同じ場所に長時間あたっていた場合(低温熱傷)や塩酸などの化学物質が皮膚に付いた場合(化学熱傷)にもなることがあります。



～やけどの応急手当の方法～

- ・すぐに水で冷やします。
- ・やけどを冷やすと、痛みが軽くなるだけでなく、やけどが悪化することを防ぎ、治りを早くします。

○ポイント

- ・水道水などのきれいな水で十分に冷やします。
- ・靴下や衣類を着ている場合は、着衣ごと冷やします。
- ・氷や冷却バックなどを使って冷やすと、冷えすぎてしまい、かえって悪化することがあります。



- ・広い範囲にやけどをした場合は、やけどの部分だけでなく体全体が冷えてしまう可能性があるため、過度な冷却は避けます。



～やけどの留意点～

やけどの程度が軽いか重いかは、やけどの深さと広さで決まります。



① 一番浅いやけどの場合

- ・一番浅いやけどは、日焼けと同じで皮膚が赤くなりひりひりと痛みますが、水ぶくれ(水疱)はできません。
- ・このような場合には、よく冷やしておくだけで、ほとんどは病院に行かなくても自然に治ります。

② 中ぐらいの深さのやけどの場合

- ・水ぶくれができるのは、中ぐらいの深さのやけどです。
- ・水ぶくれは、やけどの傷口を保護する役割があるので破らないようにします。すぐに水で冷やした後に、指先などのごく小さいやけどを除いては、清潔なガーゼなどで覆って、水ぶくれが破れないように気をつけて、できるだけ早く病院に行きます。
- ・やけどを覆うものには、ガーゼのほか、皮膚にくっつかないプラスチックシートなどがよいでしょう。野菜の皮、アロエなどは適しているとはいえません。

③ 最も深いやけどの場合

- ・最も深いやけどは、水ぶくれにならず皮膚が真っ白になったり、黒く焦げたりします。やけどがここまで深くなると、かえって痛みをあまり感じなくなります。
- ・このようなやけどは治りにくく、手術が必要になることもあるので、痛みがないからといって安心せずに、必ず病院に行きましょう。



○ポイント

- ・小さな子供やお年寄り、比較的小さなやけどでも命にかかわることがあるので注意しましょう。
- ・火事などで煙を吸ったときは、やけどだけでなくのどや肺が傷ついている可能性があるため、救急車で病院に行く必要があります。



～119番通報が必要な場合～

○やけどの範囲が広い範囲にわたっている場合や陰部のやけど、または皮膚が焦げてしまったり、白くなり痛みを感じないような深いやけどの場合には、119番通報してください。

○ガーゼで覆いきれないような大きい水ぶくれになったときは、救急車を呼ぶことも
考慮します。

